

スラブ研究センターと冬の札幌での5 ヶ月

タラス・クジオ（トロント大学ウクライナ研究講座/
センター 2011 年度特任教授として滞在）

北海道大学スラブ研究センター特任教授としての5 ヶ月間の滞在が終了し、帰国するときが来ました。私は、ウクライナに関する 1000 ページの原稿を仕上げることを可能にしてくれたスラブ研究センターのフェローシップに感謝しています。この原稿は 1953 年から現代までのウクライナ現代史を扱ったもので、現在北米の大学の出版会で出版の校閲中です。

次に挙げる三つの助力がなければ、スラブ研究センターの滞在期間が我々にとって有意義なものになることはなかったでしょう。第一に、我々は研究センターのスタッフ（特に大須賀みかさんとセンター長の望月哲男教授）の仕事熱心な姿と我々への献身的なサポートを思い出に、ここを去ることができます。クリスマスや卒業式の時期に行われるスラブ研究センターのパーティーやその他のイベントを私たちは懐かしく思い出すことと思いますが、望月先生はそういった席でつねに我々のグラスに日本の不老長寿の



クジオ氏

薬、つまりサケを沢山ついでくれました。また、ウクライナをはじめとする旧ソ連の非ロシア諸共和国研究の日本における第一人者であり、スラブ研究センター特任教授となる手続きのサポートをしてくださった松里公孝教授には個人的にお礼を言いたいと思います。

第二に、旧ソ連の7つの地域から来たスラブ研究センターの外国人たちにとっては、長兄のリーダーシップやアドバイスなしで長期滞在を乗りきるのはもちろん難しいものでしょう。今回の場合、リーダーとして長兄役を担ってくれたのは私の研究室の隣人でもあるヴラディミル・シシキン教授でした。



仕事のあとの和やかなひととき

シャフナザリヤン教授の助力なしでは耐え忍べなかったことでしょう。彼女は前向きで明るく、人生に対する情熱を持ち、すばらしいアルメニア料理、コーヒー、紅茶の作り手でもあります。仕事後には研究室でくつろいだ雰囲気のお茶会を開いてくれましたし、彼女を訪ねてきたお姉さんと妹さんも紹介してくれました。ノナさんはスラブ研究センターの5階のフロアに、研究者同士がよい関係を築けるようなリラックスした雰囲気を作ってくれました。また同時にノナ・シャフナザリヤン教授はスラブ研究センターに三人のセミナー発表者を招き、センター内での知的交流・対話も促進しました。

私が小さな「日本のニューヨーク」とよんでいる札幌は、人々の心を惹きつける北海道の歴史のほんの一部にすぎません。北海道は19世紀において、アメリカ流に「マニフェスト・デスティニー」として開拓されたアメリカ西部と、イギリス流に囚人が移送されたオーストラリアのシドニーという二重の役割を演じていました。私は妻のオクサナとともに日本でクリスマスと新年を過ごせましたが、ほかの外国人研究員たちも美しい日本の様々な地方を経験することができました。巨大で狂騒的だが、途方もなくエネルギーの満ちた東京。寺院が多くゆったりとした雰囲気の京都。私の場合は静岡にも訪れました。また、日本アルプスで大晦日を過ごし、旅館の布団で眠った飛騨高山が印象に残っています。

我々はみな、この先長く心に残るようなすばらしい思い出を胸に日本を発つことでしょう。

(英語から秋月準也訳)

